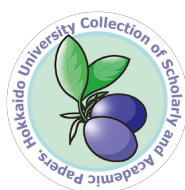




Title	小・中学生の英語学習への意識と学校適応・友人関係の関連
Author(s)	高橋, 陸斗; 加藤, 弘通
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 145, 175-183
Issue Date	2024-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.145.175
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93865
Type	departmental bulletin paper
File Information	13-1882-1669-145.pdf



小・中学生の英語学習への意識と 学校適応・友人関係の関連

高 橋 陸 斗*・加 藤 弘 通**

【要旨】 本研究では、小中学生の英語に対する「好き」と「理解している」の評価が、コミュニケーション能力の結果として学校適応感、友人関係にどのように影響するかを明らかにすることを目的とした。札幌市内の小中学生10,957名を対象に、教科の好みや理解度、学校適応感、友人関係に関する質問紙調査を実施した。分析の結果、英語を「好き」と「理解している」が両立しないケースが他教科に比べて多く見られた。また、英語の「好き」と「理解している」は学校適応感とそれぞれ正の関連を示したが、友人関係とは有意な関連が見られなかった。これらの結果から、英語教育では児童生徒が英語を「好き」になることと「理解している」ことのどちらか一方でも、児童生徒の興味関心に合わせてアプローチすることが重要であると示唆された。

【キーワード】 英語教育, 外国語活動, 学習意識, 学校適応, 友人関係

1. 問題と背景

英語教育について平成26年度小学校外国語活動実施状況調査（文部科学省 2015）の結果では、小学5・6年生の約7割、中学1年生の約6割、中学2年生の約5割が「英語が好き」と回答している。さらに、「英語が使えるようになりたい」と思っている児童生徒は小学5・6年生、中学1年生で約9割と、英語に対する意識や憧れは非常に高い水準にある。一方で、「授業の内容を理解していると思うか」という問いに対しては、小学5・6年生で7割弱、中学1年生で6割弱、中学2年生では5割を切る結果となっており、英語への好意的な感情と実際の理解度との間に大きな乖離が存在している。つまり、学習意欲の維持と学力の向上において、英語が好きという気持ちと英語の授業が分かることが一致していないことは、学習意欲や学習内容定着を検討するにあたり重要な課題となりうる。この調査（文部科学省 2015）が実施された時期は、その3年前より外国語活動が小学5・6年生で実施されていた時期であり、当時は小学校と中学校で教育の目標や指導内容が大きく変化し、それに伴って学習者に求められるスキルや態度も異なっていた。こうした教育の目的に応じた指導の在り方に対し、児童生徒がどのような反応や意識を持っていたかを検証することは、効果的な英語教育を考える上で必要不可欠である。

文部科学省はこれまで、小学校における外国語活動においては「聞くこと」「話すこと」を重視し、中学校以降の「英語」ではこれらに加えて「読むこと」「書くこと」といった4技能の習得を重視する方針を取ってきた。目指す目標として言語活動を通じてコミュニケーション

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程 教育心理学講座

**北海道大学大学院教育学研究院 准教授

DOI : 10.14943/b.edu.145.175

を図ることができる資質・能力の育成を掲げている。しかし、児童生徒自身もつ英語に対する評価軸は「英語が好きであること」と「英語を理解していること」の2つ存在していると考えられ、これらがどのように資質・能力の育成に影響を与えるのかは、未だ十分に解明されていない。さらに、英語教育はその教科の特性上、コミュニケーションツールとしての言語能力を身につけることを主眼に置いている。これは、国語や算数・数学といった学科系の教科が主に知識の習得と理解を目指すのに対し、英語は文法や語法の学習に加えて、文章表現や発表などの実技系教科の側面も有することを意味する。したがって、英語教育における指導方法や評価基準は、他の教科とは異なるアプローチが求められる。

以上の背景を踏まえ、本研究では「英語が好きであること」と「英語を理解していること」の違いに着目し、これらの評価がコミュニケーション能力にどのように影響を与えるかを検討する。具体的には、コミュニケーション能力が学校適応感や友人関係に与える影響が指摘されていることから（真田ほか2015, 山西・小倉2016）、これらの項目との関連性を探求する。特に、英語教育がコミュニケーションツールとしての英語を身につけることを目標としている点に着目し、児童生徒が得るコミュニケーション能力にも影響を及ぼす可能性があることを踏まえ、学校適応感や友人関係に関する項目を児童生徒のコミュニケーション状況の評価の項目として採用する。

本研究の目的は、英語教育における学習者の感情的要素と認知的要素が、コミュニケーション能力および社会的適応にどのように影響を及ぼすかを明らかにすることである。この結果は、児童生徒の英語への取り組みや意識をもとにした、今後の英語教育の指導法や評価方法の改善に資することが期待される。

2. 方法

調査概要：調査は2019年10～12月に、札幌市内の公立小中学校に通う小学4年生から中学3年生を対象に質問紙調査を実施した。調査は担任教師を通じ質問紙を授業時間内に一斉に配布し、11,814名の回答を得た。調査対象校に関しては地域性の偏りを避けるため、札幌市10区すべての区から、1校以上の調査協力を得て実施した。今回、分析に使用する学年は2019年度時点で英語および外国語活動が実施されている小学5年生以上10,957名とした。分析に使用した学年別の調査協力者数を表1に示す。学級種に関しては通常学級と特別支援学級両方の児童生徒が参加している。

調査項目：分析に用いる項目は以下の通りである。

①教科の好み、②教科の理解

教科の好みに関しては「(教科名)が好き」という項目、教科の理解に関しては「(教科名)はよく分かる」という項目を作成し、「まったくあてはまらない(1点)～とてもあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。教科は英語のほかに、国語、算数(数学)、理科、社会の計5教科について尋ねた。

②学校適応感に関する項目

「学校は楽しい」「学校の授業は楽しい」「学校の行事は楽しい」「学校に行きたくないと思うことがよくある(逆転項目)」の4項目から構成される。これらの項目に対して、「まったくあてはまらない(1点)～とてもあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

③友人関係に関する項目

「友だちはたくさんいる(4人以上)」「友だちといると楽しい」「友だちに『とってもいやだ』と思うことをされたことがある」「友だちに『とってもいやだ』と思うことをしたことがある」の4項目から構成される。これらの項目に対して、「まったくあてはまらない(1点)～とてもあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

3. 研究Ⅰ：英語の好みと理解の実態

まず英語の好みと理解について、学年別に回答の比率を算出した。また、全国調査との比較対象として、ベネッセ教育総合研究所(2016)が2015年に小学5年生(2,601名)・中学2年生(2,699名)対象に実施した「第5回学習基本調査」の結果を併記する。「学習基本調査」では、教科の好き嫌いを「とても好き～とても嫌い」の5件法で、授業の理解度を「ほとんどわかっている～ほとんどわかっていない」の5件法でそれぞれ質問している(図1, 2)。

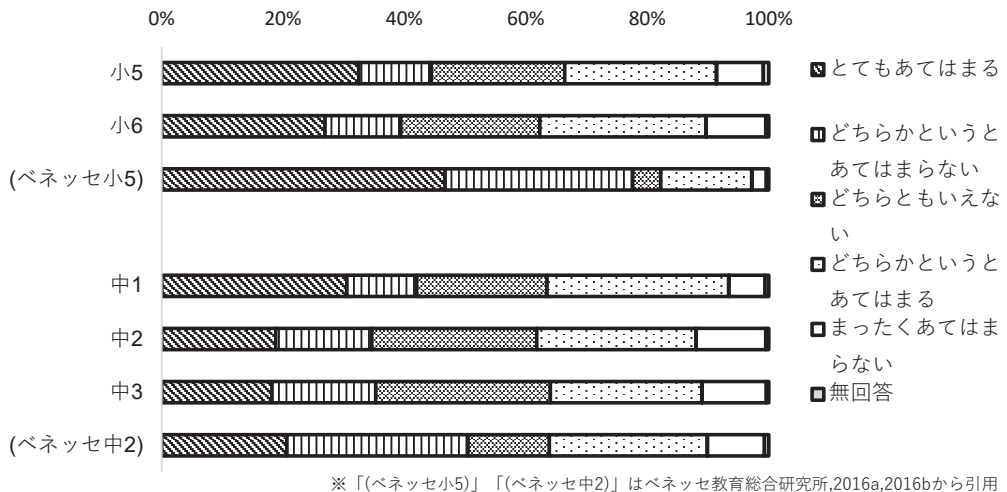


図1 「外国語活動・英語が好き」の各回答割合

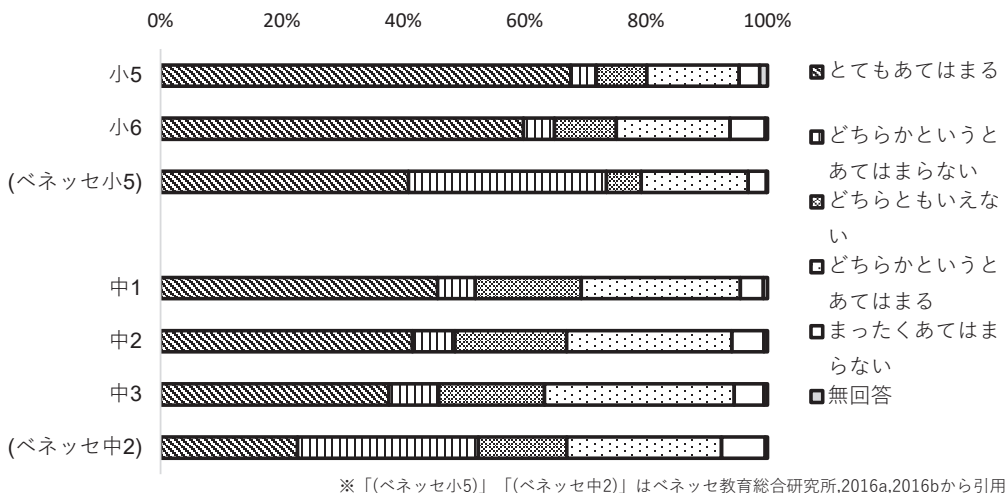


図2 「外国語活動・英語がよくわかる」の各回答割合

まず、好みについて肯定的回答をした割合は、小中学生すべての学年において約3～4割となった。小学5年生と中学2年生に関して全国と比較すると、小学5年生は肯定的回答が33.2ポイント少なく、中学2年生は15.8ポイント少なかった。また、理解について肯定的回答をした割合は小学校5・6年生では約7割あるのに対し、中学生ではどの学年でも約5割となった。これに関しても小学5年生と中学2年生に関して全国と比較すると、小学5年生は肯定的回答が1.6ポイント少なく、中学2年生は3.9ポイント少ない。また、好みと理解の項目に関して学年毎に平均点の算出及び、対応のある t 検定を行ったところ、全ての学年において英語の理解の方が英語の好みよりも有意に点数が高くなっていた(表1)。

表1 各学年の英語に対する「好き」・「よくわかる」の平均点と差

	好き		よくわかる		t 値
	平均	SD	平均	SD	
小学5年生	3.64	1.258	4.42	1.034	16.167***
小学6年生	3.49	1.278	4.22	1.177	16.173***
中学1年生	3.68	1.195	4.05	1.107	13.774***
中学2年生	3.25	1.257	3.93	1.167	25.597***
中学3年生	3.23	1.235	3.89	1.147	24.069***

*** $p<.001$

まとめると、ベネッセ教育総合研究所(2016)の小学5年生・中学2年生の結果と比較して、札幌市の小中学生は「英語が好き」という回答の割合が特に低くなっており、「英語が分かる」こととの間に乖離が見られた。

これに関して、英語の好みと、英語の理解の関連について検討するため、校種別にPearsonの積率相関係数を求めた。なお、これ以降の分析では無回答を全て欠損値として扱い、分析から除外した。加えて英語の教科の特徴を検討するため、他の4教科における好みと理解の相関も教科毎に算出した(表2)。この結果から、好みと理解・関心度の相関は、外国語・英語以外の4教科にはかなり強い相関があると言えるのに対し、外国語・英語においてはやや相関がある程度(小学: $r=.272$, $p<.001$ /中学: $r=.241$, $p<.001$)と、大きな違いがあった。このことは「英語が好き」と「英語がわかる」ことが両立しないケースが、他教科に比べて多い傾向にあることが示唆された。

表2 教科別の好みと理解間の相関

	英語	国語	社会	算数	理科
小学生	.272**	.602**	.657**	.710**	.623**
中学生	.241**	.604**	.665**	.716**	.673**

** $p<.01$

3. 研究2：英語の好みと理解に対する学校適応感と友人関係の関連

英語の好みと英語の理解の2つの変数が、それぞれ学校適応感や友人関係に及ぼす主効果を明らかにするために、階層的重回帰分析を行った。目的変数には学校適応感に関する4項目および、友人関係に関する4項目を尺度として用いた。尺度の信頼性を表すCronbachの α 係数は学校適応感に関する4項目が0.772、友人関係に関する4項目が0.573であった。友人関係に関する項目に関しては一定の信頼性があるとはいえない結果となったが、本研究においては友人関係の全体的な影響を分析することを重視して、4項目のまま尺度作成を行い、影響に関しては慎重に解釈する。Step1には説明変数として「英語の好み」または「英語の理解度」を投入し、Step2には他の4教科（国語、算数・数学、理科、社会）の好みまたは理解度を投入した。

まず「教科の好み」が、学校適応感及び友人関係の項目がどのように作用しているかを分析した（表3）。Step1における重決定係数は、小学校・中学校共に学校適応感では有意となり（小学： $R^2=.156$, $p<.001$ /中学： $R^2=.151$, $p<.001$ ），Step2における重決定係数において、学校適応感では有意な増分が見られた（小学： $\Delta R^2=.297$, $p<.001$ /中学： $\Delta R^2=.272$, $p<.001$ ）。Step2においてはすべての教科の標準偏回帰係数が有意であったが、英語は小学生では国語に続いて2番目に（ $\beta=.208$, $t(1856)=9.601$, $p<.001$ ），中学生では1番目に標準化得点が高かった（ $\beta=.213$, $t(8703)=20.747$, $p<.001$ ）。

一方で、友人関係はStep1における重決定係数は有意ではなく（小学： $R^2=.000$, $p=.645$ /中学： $R^2=.000$, $p=.096$ ），Step2でも増分は有意でなかった（小学： $\Delta R^2=.001$, $p=.224$ /中学： $\Delta R^2=.000$, $p=.418$ ）。

表3 英語の好みと階層的重回帰分析結果

	小学生				中学校			
	学級適応感		友人関係		学級適応感		友人関係	
	β		β		β		β	
	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2
英語が好き	.395***	.208***	-.025	-.035	.388***	.213***	.018	.010
国語が好き		.241***		.019		.156***		.003
社会が好き		.048*		-.003		.089***		.011
算数が好き		.192***		-.040		.193***		.003
理科が好き		.113***		.052*		.126***		.007
R^2	0.156***	.300***	.001	.004	.151***	.273***	.000	.001
ΔR^2		.298***		.001		.272***		.000

* $p<.05$, *** $p<.001$

次に、「教科の理解」が、学校適応感及び友人関係の項目がどのように作用しているかを分析した（表4）。Step1における重決定係数は、小学校・中学校共に学校適応感では有意となり

(小学： $R^2=.108$, $p<.001$ /中学： $R^2=.160$, $p<.001$), Step2における重決定係数において, 学校適応感は有意な増分が見られた(小学： $\Delta R^2=.260$, $p<.001$ /中学： $\Delta R^2=.287$, $p<.001$)。Step2においてはすべての教科の標準偏回帰係数が有意であったが, 英語は小学生・中学生共に最も標準化得点が高い教科であった(小学： $\beta=.237$, $t(1880)=$, $p<.001$ /中学： $\beta=.311$, $t(8726)=$, $p<.001$)。

一方で, 友人関係はStep1における重決定係数は有意ではなく(小学： $R^2=.001$, $p=.187$ /中学： $R^2=.000$, $p=.206$), Step2で中学生のみ増分は有意となった(小学： $\Delta R^2=.000$, $p=.363$ /中学： $\Delta R^2=.001$, $p=.012$)。ただし, 中学生のStep2において, 全ての教科で標準偏回帰係数が有意ではなかった。

表4 英語の理解に関する階層的重回帰分析結果

	小学生				中学校			
	学級適応感		友人関係		学級適応感		友人関係	
	β		β		β		β	
	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2	Step1	Step2
英語がよくわかる	.329***	.237***	.030	.029	.400***	.311***	.013	.004
国語がよくわかる		.205***		.027		.152***		.010
社会がよくわかる		.062*		-.002		.075***		.016
算数がよくわかる		.153***		-.045		.177***		.005
理科がよくわかる		.095***		.028		.086***		.020
R^2	.108***	.262***	.001	.003	.160***	.287***	.000	.002*
ΔR^2		.260***		.000		.287***		.001*

* $p<.05$, *** $p<.001$

このことから, 小中学生の英語の教科においては, 「好き」と「理解すること」のどちらを用いても学校適応感との関連を説明でき, 友人関係との関連を説明できないという結果が得られた。また, 学校適応感はその学年においても英語の回帰係数が他教科と比べて高く出る傾向にあることも分かった。

5.まとめと考察

以上の結果から小中学生において, 英語を「好き」と「わかる」ことが両立しないケースが他教科に比べて多いということが分かった。ただし, コミュニケーションに関連して「学校適応」「友人関係」に関する項目との関連を見ると, 「英語が好きであること」と「英語を理解している」の関連の様相は大きく変わらないことがわかった。

まず, 英語を「好き」であることと「理解している」ことが両立しないケースが他教科に比べて多いことが示された点について, 英語科目の特異性を挙げる。外国語・英語科の授業および評価の軸が「文法の習得」と「コミュニケーション能力」の2つあることが, 児童生徒に

とって「好き」であることと「理解している」ことが一致しない原因となる可能性がある。稲葉（2016）は、中学生を対象とした調査で、「文法説明」や「教師が読む」といった教師主導の学習法を好む一方、「発表する」や「学習者間でやりとりする」といったコミュニケーションを通じて学ぶ学習法をあまり好まない傾向を示した。これは、言語や文法体系の理解を重視する一方で、実際のコミュニケーション活動には抵抗を感じている児童生徒がいる可能性を示唆している。さらに、本研究の結果から、英語科目に対する「好き」という感情と「理解している」という認識が他教科とは異なる様相を呈していることが明らかになったことから、英語科目は、座学的な要素（文法・語彙の習得）と実学的な要素（コミュニケーション能力の育成）が混在しており、児童生徒にとって特異的な価値判断基準が存在する可能性がある。具体的には、「英語の文化や語法に興味があり好きだが、話すことは苦手で理解できない」あるいは「文法やテストは苦手ですが好きではないが、英語を使ってコミュニケーションを取ることは得意である」といったケースが考えられる。

しかし、「学校適応感」や「友人関係」といったコミュニケーション能力が関連する文脈においては、英語を「好き」であることと「理解している」ことのどちらも、学校適応感と関連し、友人関係とは関連しないという同様の結果が得られた。もともと「友人への安心感」「友人との関係」は学校適応感に影響を与えることは指摘されており（江本・大久，2012；中井，2016）、「学校適応感」と「友人関係」との間に関連があることは明らかであるが、英語の学習との関連を見たときには異なる様相となっていた。英語を中心に学習全体が児童生徒の学校適応感を高める効果があることを示している一方で、特にコミュニケーション能力が求められるはずの「友人関係」において英語の教科に対する認識の影響が見られなかったことで、「言語としての英語」の学習や「コミュニケーションツールとしての英語」の学習のどちらが特に効果的なかを考察することは難しい。本研究で明らかになったことだけで考えるのならば、英語教育においては、「勉強としての英語」と「コミュニケーションとしての英語」のどちらが良い、どちらが良くないということはなく、むしろどちらも好きではない・理解できていないという状況を改善することが重要であると考えられる。実際、英語科目はアプローチの方法が豊富であり、児童生徒の多様なニーズに応えることが可能である。学習指導要領には、「児童が国語科や音楽科、図画工作科などの他教科等で得た知識や体験などを生かして活動を展開することで、児童の知的好奇心を更に刺激することにもなる」と書かれており、他教科との関連も強いのが特徴的だ。これらの活動をもって児童生徒の興味関心を引き出し、また、個々の学習者の得意分野や興味に合わせた学習活動を提供することで、英語に対する「好き」と「理解している」という児童生徒の認識のどちらかに合わせたアプローチが可能になる。

さらに、英語の理解度や好みが学校適応感に影響を与えていることから、英語教育を通じて児童生徒の学校生活全体をサポートすることができる可能性が示唆される。これは、児童生徒によっては英語学習が自己効力感や達成感をもたらし、それが学校生活への満足度や適応感につながると考えられる。一方で、友人関係との関連が見られなかったことについては、英語学習が直接的に友人関係を構築・維持する要因とはなりにくい可能性がある。友人関係は、コミュニケーション能力や共通の興味関心、周囲環境など多様な要因によって形成されるため、教科の好みや理解度だけでは十分に説明できなかったと考えられる。

以上のことから、英語教育においては、児童生徒が英語を「好き」になることと「理解できる」ようになることの両面を重視し、多様な学習アプローチを提供することが重要である。

これにより、学校適応感の向上に寄与し、児童生徒の総合的な成長を促すことが期待される。

しかしながら、本研究にはいくつかの限界がある。まず、友人関係に関する尺度の信頼性が十分でなかったことから、結果の解釈には慎重を要する。また、データが特定の地域に限定されており、他地域への一般化には注意が必要である。今後の研究では、より多様な地域やサンプルを対象とした調査や、質的研究を組み合わせることで、英語教育が児童生徒の学校適応感や友人関係に及ぼす影響をより詳細に解明することが求められる。

文 献

- ベネッセ教育総合研究所（2016a）「第5回学習基本調査」報告書〔2015〕基礎集計表（小学生）. https://benesse.jp/berd/up_images/textarea/gkihon_data_syou.pdf（参照日 2024.9.1）
- ベネッセ教育総合研究所（2016b）「第5回学習基本調査」報告書〔2015〕基礎集計表（中学生）. https://benesse.jp/berd/up_images/textarea/gkihon_data_chu.pdf（参照日 2024.9.1）
- 江村早紀・大久保智生（2012）小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討. 発達心理学研究, 23（3）, 241-251
- 稲葉みどり（2016）英語の教室活動に対する中学生の本音-英語嫌いにしないためのヒント-. 教科開発学論集, 4, 57-68
- 文部科学省（2015）平成26年度小学校外国語活動実施状況調査 結果. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2015/09/29/1362169_02.pdf（参照日 2024.9.1）
- 文部科学省（2008a）小学校学習指導要領（平成20年告示）解説 外国語活動編
- 文部科学省（2008b）中学校学習指導要領（平成20年告示）解説 外国語編
- 文部科学省（2017a）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編
- 文部科学省（2017b）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編
- 真田穰人, 浅川潔司, 佐々木聡, 貴村亮太（2015）児童の学習意欲の形成に関する学校心理学的研究：学習規律と学級適応感との関連について. 兵庫教育大学教育実践学論集15, 27-38
- 山西健斗・小倉正義（2016）自己効力感が児童・生徒の精神的健康に与える影響-学習に関する自己効力感に着目して-. 鳴門教育大学学校教育研究紀要31, 143-152

The Relationship between Attitudes Toward English Learning, School Adaptation, and Friendships among Elementary and Junior High School Students

Rikuto TAKAHASHI, Hiromichi KATO

Keywords

English education, foreign language activities, learning attitudes, school adaptation, peer relationships

Abstract

This study aimed to explore how the evaluations of "liking" and "understanding" English among elementary and junior high school students affect their communication skills, school adaptation, and friendships. A questionnaire survey was conducted involving 10,957 students in Sapporo City, focusing on their evaluations of "liking" and "understanding" of several subjects, school adaptation, and friendships. The analysis revealed that cases where students both "like" and "understand" English are less common compared to other subjects. Additionally, while "liking" and "understanding" English showed positive correlations with school adaptation, no significant correlation was found with friendships. These results suggest that in English education, it is important to provide diverse learning approaches that prioritize either "liking" or "understanding" English for students.

